

戦後古典教育実践史の研究（一四）

—『国語教育研究』誌掲載論稿を中心に—

渡 辺 春 美

はじめに

戦後古典教育実践史研究の一環として、広島大学教育学部国語教育学会誌『国語教育研究』（広島大学教育学部国語科光葉会刊）掲載の古典教育実践論稿を取り上げて考察したい。『国語教育研究』は、一九六二年二月に創刊されて以来、四三号（二〇〇〇年現在）を数える。掲載された古典教育関係論稿は、六〇本を越える。本発表では、その内、以下に掲げた、昭和三〇年代から五〇年代の、実践を中心にまとめられた論稿を対象として考察することにする。各論稿に記述された実践は、程度の多少はあれ、わが国の戦後古典教育の実践とその背景としての思潮を反映するものと考えられる。論稿の考察をとおしてわが国における古典教育実践の史的動向の仮説を得ることも可能であると考えられる。ここに考察の意義を認めることもできよう。

時期区分には、学習指導要領の改訂に従って区分するなどいくつかの方法があるが、ここでは、便宜上、三〇・四〇・五〇の各年代に分けて考察していくことにする。

まずは、各時期の論稿群を概観し、ついで個々の論稿ごとに実践の内容を紹介・考察する。次に、①古典教

育の目標、②学習者の位置、③古典教育の方法という観点から整理し、最後に同じ観点から全体をまとめることにした。

一 『国語教育研究』誌掲載古典教育実践論稿

1 古典教育実践論稿目録

古典教育実践論稿の目録を各年代ごとに整理して掲げれば、次のようになる。

【昭和三〇年代（一九五五～一九六四）】

- ア 池田恭仁子 「生徒の季節感とそのとらえ方―『枕草子・春は曙の段』学習指導を通して―」（創刊号・一九六〇年二月）
- イ 万代 勉 「職業課程における古典指導―入門期の二つの指導―」（二号・一九六〇年一月）
- ウ 広瀬節夫 「『伊勢物語』の学習指導」（三号・一九六一年四月）
- エ 池田恭仁子 「古典教材における文法指導と文学指導をどこまで、どのようにしたか―高一『伊勢物語』（付『竹取物語』）の場合―」（四号・一九六二年八月）
- オ 広瀬節夫 「『源氏物語』の学習指導―螢の巻・高二のばあい―」（八号・一九六三年十二月）
- カ 神田和正 「読みを深めるために―一つの試み、感想のメモを使って―」（八号・一九六三年十二月）
- キ 森一郎氏 「源氏物語の鑑賞と指導」（一九六三年十二月）

ク 豊田克也 「農業高校における国語教育―二つの授業をとおしての考察―」(一九六三年一二月)

【昭和四〇年代(一九六五―一九七四)】

ケ 蜂須賀英治 「古典乙Ⅰの年間指導計画―一年生の古文の計画―」(二三号・一九六七年五月)

コ 伊東武雄 「更級日記指導の実践と反省―心情語に着目しての取り扱い―」(一四号・一九六八年二月)

サ 下田 忠 「課題意識にもとづく学習指導の実際―古典教育の場合―」(一六号・一九六九年四月)

シ 阿部真人 「古典学習における教材反応と鑑賞の深化・拡充―中学校における万葉集の場合―その一

―読後の教材反応を中心として―」(二六号・一九六九年四月)

ス 鶴野 馨 「古文における課題学習の実際から―蜻蛉日記の場合―」(一七号・一九七〇年六月)

セ 阿部真人 「古典学習における教材反応と鑑賞の深化・拡充―中学校における万葉集の場合―その

二―指導の実際―」(一九号・一九七二年一二月)

ソ 伊東武雄 「蜻蛉日記指導の一つの実際―普通科甲の場合―」(二〇号・一九七三年一二月)

タ 下田 忠 「説話教材の取り扱い―ひとつの試み―」(二〇号・一九七三年一二月)

【昭和五〇年代(一九七五―一九八四)】

チ 世羅博昭 「『平家物語』の学習指導―『一の谷合戦の場』をとりあげて―」(二四号・一九七八年八月)

ツ 世羅博昭 「古典Ⅱにおける『源氏物語』の教材化―『明石の上物語』と『浮舟物語』をとりあげて

(2)―」(二六号・一九八〇年一〇月)

テ 新治 功 「主体的な古文学習」(二六号・一九八〇年一〇月)

ト 片桐啓恵 「五里霧中の舳先―一年の終わりの古典人形劇―」(二六号・一九八〇年一〇月)

- ナ 大崎康子 「『古典』を読む―『枕草子』の場合―」(二六号・一九八〇年一〇月)
- ニ 藤原敏夫 「『狂言』学習についての一つの試み―舞台『瓜盗人』の録画を使って―」(二六号・一九八〇年一〇月)
- 又 竹盛浩二 「工業高校における古典教育の実際」(二六号・一九八〇年一〇月)
- ネ 吉本浩士 「『国語I』古文入門期の指導について」(二八号・一九八四年六月)
- 【昭和六〇年代・平成年代(一九八五〜)】
- ノ 片桐啓恵 「教室に声をとりのどすために―群読『平家物語』の群像』を中心に―」(二九号・一九八五年六月)
- ハ 伊東武雄 「古典学習指導の反省と課題―伊勢物語23・24段の受容の実態を中心に―」(二九号・一九八五年六月)
- ヒ 菅原敬三 「教材研究と教材の扱い方(2)―枕草子一〇一段『御かたがた、君たち』(清少納言)―」(三〇号・一九八六年八月)
- フ 松田久理美 「高校における古典入門の指導―単元『古文に親しむ』の実践を中心に―」(三〇号・一九八六年八月)
- ヘ 加藤直美 「古典学習深化の可能性―『源氏物語』の場合―」(三四号・一九九一年六月)
- ホ 永楽仁八 「意欲的な古典の学習をめざして」(三六号・一九九三年三月)
- マ 北川真一郎 「『平家物語』を読む―古典購読に通じる授業実践―」(三六号・一九九三年三月)
- ミ 江藤結花 「古典に楽しませる学習指導の試み―『伊勢物語』の実践―」(三七号・一九九四年三月)

ム 信木伸一 「対立構造に着目した物語の読みの授業―源氏物語『桐壺』の授業から―」(三七号・一九九四年三月)

メ 伊東武雄 「古典学習指導のとりくみ―伊勢物語二四段々梓弓々の場合―」(三七号・一九九四年三月)

月)

モ 小榊雅典 「初めての古文との出会い―『伊勢物語』って何だ!?!―」(三八号・一九九五年三月)

ヤ 松浦弘幹 「『読み』を意識した古今和歌集の指導」(三八号・一九九五年三月)

ユ 片桐啓恵 「ファンタジーとしての『竹取物語』をまるごと読む―定時制一年生の教室で―」(三八号・一九九五年三月)

ヨ 渡辺春美 「『徒然草』学習指導の試み―表現を軸として―」(四〇号・一九九七年三月)

ラ 北川真一郎 「作品への視野をひらく古文の読解指導―古文学習指導三年間のあゆみをふりかえって―」(四一号・一九九八年三月)

リ 金子直樹 「古典単元学習の試み」(四二号・一九九九年六月)

ル 吉田佳代 「生徒の主体性を生かした古文指導の実践―『源氏物語』の場合―」(四三号・二〇〇〇年三月)

2 古典教育実践論稿の概観

昭和三〇・四〇・五〇年代の各論稿を教材、目標、授業方法という観点から整理すると、次のようになる。

【昭和三〇年代（一九五五～一九六四）】

| ア | イ | ウ | エ | オ | カ | キ | ク | 年月 | 号 | 授業者 | 学 | 時 | 中心教材 | 中心目標 | 中心的授業方法 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---|-------|---|----|------------------------|-------------------------------|----------------------|
| 60・02 | 60・11 | 61・04 | 62・08 | 63・12 | 63・12 | 63・12 | 63・12 | 60・02 | 創 | 池田恭仁子 | 一 | 不 | 枕草子 春は曙(教) | 日本文化の理解 | 作文による比較を通じた理解 |
| 2 | 3 | 3 | 4 | 8 | 8 | 8 | 8 | | | 万代 勉 | 二 | 不 | 竹取物語 滋野井子別れ(教) | 文語と口語の類似、生活意識 内容を理解・鑑賞する態度 | 朗読の繰り返し |
| 1 | 1 | 不 | 一 | 小 | 五 | 不 | 三 | | | 広瀬節夫 | 一 | 3 | 伊勢物語二三段(教) | 平安時代の人々の心と文学と 社会への意識喚起 | 課題プリント |
| | | | | | | | | | | 池田恭仁子 | | 不 | 大和物語一四九段(開) | 主体的鑑賞 | 読みによる作文 |
| | | | | | | | | | | 神田和正 | | 4 | 魚になった人(原典 雨 月物語)(教) | 主題把握、古典への興味喚起、 鑑賞 | 感想メモの利用 |
| | | | | | | | | | | 広瀬節夫 | | 30 | 源氏物語 螢の巻(教) | 作者の物語観・源氏物語の文 章の特色 | グループ学習 |
| | | | | | | | | | | 森 一郎 | | 不 | 源氏物語 絵合 帚木若 葉(不) | 人の心の発見と人生への開眼 | 文章の解釈 |
| | | | | | | | | | | 豊田克也 | | 4 | 更級日記(教) | 読解鑑賞の方法 | 感想メモ |
| | | | | | | | | | | | | | | 読解力育成 作者の心情把握 | 読解鑑賞 文法から 作品解析 説明 |
| | | | | | | | | | | | | | | 読解力育成(古語・古典文法 の理解) | 課題プリント |

【昭和四〇年代（一九六五～一九七四）】

| ケ | コ | サ | シ | ス | 年月 | 号 | 授業者 | 学 | 時 | 中心教材 | 中心目標 | 中心的授業方法 | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------------|--------------------------------|------------------------|---------------------------|-----------------------|----------|
| 67・06 | 68・02 | 69・04 | 69・04 | 70・06 | 67・06 | 68・02 | 69・04 | 69・04 | 67・06 | 蜂須賀英治 | 一 | 不 | 徒然草他(角川書店教科 書 古典乙I古文I) | 読解力育成(古語・古典文法 の理解) | 解釈 文法的説明 |
| 13 | 14 | 16 | 16 | 17 | | | 伊東武雄 | 二 | 10 | 更級日記(教) | 作者の心情・性格の理解 | 心情語に着目 | | | |
| | | | | | | | 下田 忠 | 全 | 不 | 古典乙I(一・二年用) | 一年文語のきまり、二年読解 の応用力、三年読解・鑑賞力 | 読解の三段階法 | | | |
| | | | | | | | 阿部真人 | 三 | 7 | 東京書籍 他(教) | 一読後の教材反応の調査 | 課題学習 | | | |
| | | | | | | | 鶴野 馨 | 三 | 36 | 万葉集 二四首(一部開) | 蜻蛉日記により、男性・女 性・愛・人生を考えさせる。 | 各和歌に対する消極 的・積極的反應調査 | | | |
| | | | | | | | | | | 蜻蛉日記 上巻(開) | | 課題学習 | | | |
| | | | | | | | | | | | | 兼家への手紙 | | | |

| | | |
|---------------------------|----------------------------|----------------------------|
| セ | ソ | タ |
| 72・12 | 73・12 | 73・12 |
| 19 | 20 | 20 |
| 阿部真人 | 伊東武雄 | 下田 忠 |
| 三 | 三 | 三 |
| 不 | 13 | 1 |
| 万葉集 二四首（一部開） | 蜻蛉日記・曠野（堀辰雄） （一部開） | 清水観音利益のこと （『沙石集』）（教） |
| 教材反応に基づく、大意把握、感動発見の授業の有効性 | 平安女流文学における女性の生き方、作者とその心理理解 | 当時の庶民の願いを読み取る。説話文学の本質をつかむ。 |
| 大意把握の工夫、感動発見と追体験 | 読解の三段階法 | グループ学習と全体での話し合い。 |

【昭和五〇年代（一九七五〜一九八四）】

| | | | | | | | |
|---------------------|---------------------------|----------------------------|-----------------------------------|----------------------------|-------------------|-----------------------------|----------------------------|
| チ | ツ | テ | ト | ナ | ニ | ヌ | ネ |
| 78・08 | 80・10 | 80・10 | 80・10 | 80・10 | 80・10 | 80・10 | 84・06 |
| 24 | 26 | 26 | 26 | 26 | 26 | 26 | 28 |
| 世羅博明 | 世羅博明 | 新治 功 | 片桐啓恵 | 大崎康子 | 藤原敏夫 | 竹盛浩二 | 吉本浩士 |
| 一 | 三 | 一 | 一 | 三 | 一中 | 三工 | 一 |
| 17 | 2 | 5 | 不 | 3 | 不 | 14 | 14 |
| 一の谷の合戦の場（『平家物語』）（開） | 『明石の上物語』『浮舟物語』（『源氏物語』）（開） | 伊勢物語 6段（開） | 筒井筒・都鳥（伊勢物語） 八俣の大蛇（古事記） （教） | 枕草子の一二の段（一部開） | 大蔵流狂言「瓜盗人」 （開） | 今昔・伊勢・故事成語 枕草子・徒然草（一部開） | 仁和寺にある法師・児のそら寝、今昔物語 |
| 戦乱の世を生きる人間の姿 | 作者の表現主題、表現鑑賞 | 受領層に属する明石、浮舟の生き方を探る。物語の読解力 | 情景の想像と心情把握、表現の鑑賞、協力による学習深化 | ”つくる”作業による古典の楽しさを感じ得。生徒の変容 | 人間そのものへの洞察 | 舞台（録画）が、生徒の反応と理解の把握（指導者の意図） | （古典への興味・関心の喚起） |
| グループ学習 | 一部、グループ学習 表現（感想文・レポート） | グループ学習、グループによる物語創作 | グループ学習 | 一斉学習、読解的方法 | 実験的授業 | 視聴覚教材使用 | プリント学習、故事成語に基づく話発表 |
| | | | | | | | 朗読、ノートの取り方、文法の理解、辞典・参考書利用等 |
| | | | | | | | プリント学習 続き話の創作 |

②（注）①「学」の欄の「小」は小学校、「中」は中学校、「全」は高校全学年、「工」は工業高校、他の漢数字は高等学校の学年を表す。
②「時」の欄の「不」は不明を表す。「中心教材」の欄の「教」は教科書教材、「開」は開発教材、「一部開」は一部開発教材使用

以上、各論稿にまとめられた授業実践を概観したが、次の点に特色が見いだされる。

中心教材に関しては、三〇年代には、教科書教材の使用が多いが、四〇年代から五〇年代にかけては、教師による一部使用も含めて、開発教材の使用が多くなっている。

中心目標は、三〇年代には、日本文化の理解、生活意識の把握、文学と社会への意識の喚起など、文化的、社会的目標が目につく。三〇年代末から四十年代初めにかけて、読解力、応用力、鑑賞力の育成が目を引く。また、生徒の教材への反応とそれを踏まえた授業のあり方を探ることを目的とした実験的授業も行われている。五〇年代には、人間の姿、人間そのものをとらえ、生き方を考えさせる目標が見いだされる。

中心的授業方法は、三〇年代には課題学習が多く、少なくともはあるが四〇年代にも見いだされる。四〇年代末から五〇年代にかけては、グループ学習が多くなっている。

概観に基づき特色をとらえることを試みたが、以下、節を改め、各授業実践を考察することをおして三〇・四〇・五〇年代の古典教育実践の特色をとらえたい。

二 古典教育実践の考察

1 昭和三〇年代（一九五五～一九六四年）の古典教育実践の考察

(1) 古典教育実践の考察

『国語教育研究』誌掲載の古典教育実践論稿の中で、最も早い時期に報告されたのは、池田恭仁子氏の（ア）「生徒の季節感とそのとらえ方―『枕草子・春は曙の段』学習指導を通して―」（創刊号・一九六〇年二月）で

ある。これは、昭和三三年度の一二月から一月にかけて行われた実践の報告である。池田恭仁子氏は、「自分が受け継いできた日本人の文化を理解すること」(五七頁)を指導に求め、「春は曙」を読み終えた後、生徒に同様の作文を書くことを課し、いくつかをプリントし話し合わせるという授業を展開した。ここでは、表現(作文)による理解の深化と、生徒の表現(作文)を教材化し、「春は曙」と比較しつつ話し合わせることによる理解の深化とがねらわれている。池田恭仁子氏は、第四号(一九六二年八月)には、(エ)「古典教材における文法指導と文学指導をどこまで、どのようにしたか―高一『伊勢物語』(付『竹取物語』)の場合―」を発表している。ここでは、自己の昭和三三年度から三四年度までの『伊勢物語』を中心とした古典の授業実践を、文法指導と文学指導の両面から省察し、古典を文学作品として読む「作品教育」への方向を探っている。

万代勉氏は、(イ)「職業課程における古典指導―入門期の二つの指導―」(二号・一九六〇年一月)を報告した。万代勉氏は、職業課程における高校生に対する古典教育として、「『古典を読む技術』より『古典そのものから多くのものを読みとる、その読み取りの内容自体』を大切にしたい」(四七頁)とし、古典を読む態度の育成、江戸文学の概観の他、「江戸の社会や人々の生活ぶり、生活意識などが、作品に具体的に描かれるようすを学ぶ」、「作品にそった理解をするとともに、疑問の箇所を解決しながら内容を理解・鑑賞する態度を作る」(四八頁)ことを目標としている。授業は、「あらかじめ設問紙を配布して、生徒自身で読み解きながら内容にせまる方法」と「口語と文語を比較しつつ、その類似性を言語面から比較すると共に、読みのくりかえしを併用することによって、実感として古文をとらえるような方法」(四八頁)を中心に、前者では感想メモや討議を導入し、後者では、口語訳プリント、朗読記録表を用いて展開している。

広瀬節夫氏は、(ウ)「『伊勢物語』の学習指導」(三号・一九六一年四月)をまとめている。広瀬節夫氏は、

「古文において少しでも人間について、生きるといふことについて考えるためには、古文の登場人物の生き方その他に対する生き生きした興味を起すようにするには、古文の授業をどのように展開していくかが問題」として、古文の授業を「文学教育」（以上一二頁）として展開しようとした。授業は、「一つの試練を越えて添いとげる男女の純愛を、生徒といっしょに読んで行きたかった」（一二頁）という『伊勢物語』二三段を教材に、『大和物語』一四九段を比較のための参考教材として、「歌物語の叙情的なうつくしさを味わう」とともに、さらに「平安時代の人々の心と文学の関係、文学と社会との関係に意識を向けていく」（以上一三頁）ことを目標の一つとして行われた。授業の留意点として、「問いはプリントにして、授業の前に渡し」、「生徒達が自分でものを考え、古文の学習に参加するように」、また「生徒のなまの感想を自由にのべさせ」、「感想文を書かせ放しにせず、整理しなおし、その作品について、生徒各自、自分の考え方以外にも、さまざまの考え方をもちうることに気づかせる資料とし、さらに深い作品検討に入っていく手がかりとなるよう努める」（一九頁）などが掲げられている。授業後には、生徒の授業への感想文を基に、授業者の詳細な反省がなされている。その内、「問題学習」（課題学習）については、「古文学習においても、問題学習というものが、どんなに大切なものかが、よくわかる。今までの古文の授業というものは、あまりにも、教師の方からの与えっぱなしで、生徒を受け身にしすぎ、それが生徒の古文に対する学習意欲を失わせる一つの原因となっていたように思われる。教師はもっと、生徒たちの手による学習というものを、古文のばあいにも考えなければならぬ。」（二四頁）と述べている。また、比較読みによる感想文に関しては、もっと感想文の書かせ方を考えなければならぬとしながらも、「比較作業というものが、一つの作品のみでなく、二つの作品の理解にまでおよぶことを示してくれる」、「そして、ただ一つの作品を読む場合と比べてさらにもう一つの作品を読む場合は、その理解がいっ

そう深められていく」(二五頁)と、その効果がとらえられている。

広瀬節夫氏は、二年後に、(オ)「『源氏物語』の学習指導―螢の巻・高三のばあい―」(八号・一九六三年二月)を発表している。高校三年生を対象として、国語(乙)の時間に、遠藤嘉基編『古典文学』(中央図書)を用い、『源氏物語』の桐壺・夕顔・若紫・葵・須磨・螢・御法の巻々を約三〇時間をかけて行った授業の内、螢の巻の実践を取り上げて報告したものである。語句の省略、敬語の使い方、長文に対する注意、語句の意味、文章の構成に注意して解釈させ、内容把握を主眼とした指導を行っている。広瀬節夫氏は、この指導の中で、「感想メモ」を取らせている。授業における「感想メモ」の扱いについては明らかではないが、その考察で、「螢の巻の物語論を読むこと」によって、かれらの『源氏物語』に対するせまりかたが、右(「感想メモ」の考察―渡辺注)に述べたように、深くもなり広くもなることができた。(七五五頁)と、「螢の巻」の物語論を読む効果について述べ、扱う意義を確認している。「感想メモ」に関しては、小学校における実践ながら『国語教育研究』八号に、神田和正氏による(カ)「読みを深めるために―一つの試み、感想のメモを使って―」(八号・一九六三年一二月)が掲載されている。これは、『雨月物語』に基づく「魚になった人」(単元「むかしの本」日書版小学国語五年の一 一二四―一三二頁)を教材とした実践とその考察である。実践研究が、「①読みをより深め、より定着させるための方法として、書くこと(感想のメモ)を利用しようと思うが、どのように利用したのが効果的であるか。②主題にせまるために書くこと(感想のメモ)を利用しようと思うが、どのように利用したら効果的であるか。」(六二六頁)という問題意識をもって行われており、注目される。同号には、森一郎氏の(キ)「源氏物語の鑑賞と指導」(八号・一九六三年一二月)が掲載されている。「表現の微妙な言いまわしをも感受するこまやかな心をもって、作品にひらけゆくさまざまな人生にひそむ人の心を発見

し、無限に心の眼をひらいていく営みこそ鑑賞教育＝文学教育の目標である。」とする考えに立つて行われた、敬語の学習指導と、授業者による『源氏物語』の導入としての話の実践例とが紹介されている。前者については、「文法的分析に出発しつつ文学的解析へと高め深め」ていくことをねらい、後者については、「人生の明暗にひそむ人の心を思いやり、人の生の喜びと悲しみに心の眼をひらく『さまざまな人間・人生への開眼』という文学的生活を深める一助たらんと念じつつ話す」（七六五頁）と述べている。同号には、また、豊田克也氏（ク）「農業高校における国語教育―二つの授業をとおしての考察―」（一九六三年一二月）が掲載されている。ここには、「学習意欲にはなほだしく欠ける組」（一〇五五頁）における『更級日記』（『高等学校 国語三 総合』角川書店刊）の実践報告がなされ、問題点を基に今後の方向が模索されている。実践は、段落のあらすじ、解釈と教科書原文との対応に関する問題と、内容に関する問題とからなる課題学習プリントを用いてなされた。「解釈をしゃべるだけでは退屈するだろうと思って、プリントをやらせようとしたのだが、一通り解釈をしていっているうちに生徒を退屈させてしまっている。」（一〇五八頁）との反省のことばも見いだされた。

（2）古典教育実践の考察のまとめ

次の点に昭和三〇年代の古典教育の特色を見ることができよう。

A 古典教育の目標

① 日本文化の理解、作品に描かれた生活意識の把握、文学と社会への意識喚起など文化的、社会的目標の設定。
② 古文の実感的理解、鑑賞、② 読解鑑賞の方法、読解力育成。

B 学習者の位置

① 生徒の主体的学習、生徒の感想を生かした授業が求められた。

C 古典教育の方法

①古典（古文）教育を、人間や生きることについて考える、あるいは「さまざまな人間・人生への開眼を目指す古典文学教育」として行おうとする考えが見られる。②授業の方法として、課題学習、及び感想文・感想メモを用いた授業が試みられた。後者は古典文学教育と結びついている。しかし、それらの生かし方については、なお模索状態にあると考えられる。③話し合い・討議・感想メモの利用をとおして、学習者の交流による学習の深化が求められている。④作文・感想の教材化、課題プリントの作成、話し合い・討議、教材の比較、朗読記録表などによる学習指導が試みられた。

この内、課題学習は、増淵恒吉氏の影響（注1）が、また、感想メモには、西尾実氏の影響（注2）が見出されよう。

2 昭和四〇年代（一九六五～一九七四年）の古典教育実践

(1) 古典教育実践の考察

昭和四〇年代の最初の論稿に、蜂須賀英治氏（ケ）「古典乙Ⅰの年間指導計画―一年生の古文の計画―」（一三号・一九六七年六月）がある。ここでは、「一年生で古文読解の基礎的な技能・知識を与え、二年生で読解力を深め、三年生では古文が読める、古典が鑑賞できる」（一八頁）ことが目指され、一年では、読解のために古語と古典文法を中心に据えた指導が計画されている。例えば、一年一学期の「九月二十日のころ」（『徒然草』）の指導は、「品詞論に入って動詞の指導をした。古文では主語の省略が多く、述語をとらえて主語を推察せねばならないこと、古語辞典を利用する際に活用語の見出しは終止形であることなどの理由で、動詞の指導

から始めた。活用のし方(活用形)それによる分類(活用の種類)を中心にした(ここでは四段、下二、サ変、ラ変、上一)。文論に関しては、古文では主語の省略が多く、述語の表現のし方で主語が判断できることを本文の例で示した。/また、作者の言いたいことが表わされているのはどの文か考えさせ、段落、主題、要旨などの用語について説明した。(二二頁)とされている。ここでは古典読解のための基礎技能として古典文法が重視されている。また、高等学校三年間を見通して古典教育の計画を立てようとしていることがうかがえる。

伊東武雄氏は、心情語に着目し、藤原与一氏の読解の三段階法(注3)による古典教育を一貫して実践した。伊東武雄氏(コ)「更級日記指導の実践と反省―心情語に着目しての取り扱い―」(二四号・一九六八年二月)において、「平安朝の女流日記文学指導の一つの方法として」、「作者の心情を理解し、ものの感じ方、考え方を読みとること、そしてその性格と人がらを考えさせることが必要」とし、「その最初の手がかりとして、心情語を吟味分析することは意義のあること」(七七頁)と述べている。その具体的方法は、読解の三段階法の素材読みによるとし、「まず、時、場所、登場人物、事件を示すことば(―これらを外的素材と呼びたい―)を吟味し、心情語の用いられる外的条件を明らかにする。次に、心情語を中心に、状態語(―これらを内的素材と呼びたい―)を分析して、作者の心情、心境、性格、生への姿勢を理解させる。」(以上、七七頁)と説明されている。心情語の指導については、①文脈に即し、ダレの、ドンナトキの、ドコデの、ドンナ事件の心情語であるかを理解させ、心情の生じた原因と心情のかけり、引き起こされる動作を分析吟味する時、その性格は明らかになる、②心情語の意味について、正しく深い理解を持つ、③作者の心情を深く、的確につかむためには、対象となる心情の性格が正しく把握されていなければならない、④状態語、動作語の分析によって、動作・状態の奥にある主体の心情を読みとり、その援用によって、心情語の理解が深められねばならない、⑤心

情語を掘りさげ、作者の人間性と生への姿勢を理解させる、と留意点が挙げられている。指導の具体例として、「門出」の場合を掲げる。「板書」と「一 留意点」・「二 授業過程」によって、授業の実際が想像できよう。

| | |
|---|--|
| <p>【板書】 門 出 — 出発の悲しさ— 一 内容の整理 (場所) (光景) (作者の気持、性格)</p> <p>1 年頃遊びなれつる所 上総 国府</p> <p>①日の入りきは 霧 すごし あはれに悲し 打ち泣かれぬ</p> <p>②あらはなる家 やさしさ やさしき</p> <p>薬師仏 (感傷的) 旅へ出発</p> <p>2 門出したる所 へいまたち</p> <p>海 萱屋 野 悲し 旅での 海 おもしろし ←感動 夕霧 をかし 美しさ、光景の趣深さ</p> <p>3 いかた(下総国) 恐ろし いも 旅での 寝られず 不安</p> <p>二 ことばの整理—注意すべき語法(省略—渡辺)</p> | <p>一 留意点 三つの場所での心情語(悲し、あはれに悲し、恐ろし)の分析によって、その心情を知り、やさしく可憐な作者の性格を理解させる。</p> <p>二 授業過程</p> <p>1 音読させる。 2 口語訳をさせる。 3 指導過程①→⑤の質問をし、板書として整理する。 (作品の分析)</p> <p>①いくつの場所が出てくるか、どんな場所か。 ②天然、景色の描写とそれへの感想を示すことばをさがし出せ。 ③それぞれの場所での心情語をさがし、分析せよ。 ④作者の人がらを記せ。 ⑤心情語の含まれている心情描写の文と光景描写の文との表現上の違いを述べよ。</p> <p>4 ことばの整理(①「る」「自発・可能、②同格の「の」、③「つ」と「ぬ」)</p> |
|---|--|

〈生徒の授業記録(八八頁)、指導過程(八〇頁)参照〉

(ソ)「蜻蛉日記指導の一つの実践―普通科甲の場合―」(二〇号・一九七三年十二月)によれば、伊東武雄氏は、次のような実践を展開した。

I 導入・・・堀辰雄々かげろふの日記・曠野々の話し合い(グループ学習)

II 展開・・・教科書「蜻蛉日記」(角川書店『古典乙II』)の読解と鑑賞―作者の生き方と心情の理解(一

斉) 読解の三段階法素材読みの適用と心情語への着目

1 父の旅立ち 2 心憂き世 3 道綱の元服

III 終結・・・教科書・プリントによる作品鑑賞のまとめ

4 ゆするつき道綱鷹を放つ(傍注プリント)

5 蜻蛉日記序―学習のまとめと確認― 蜻蛉日記年表利用 感想文の提出

(九七頁参照)

この実践の特色は、以下の点に見出される(注4)。
 ①教科書教材に加えて、興味・関心を喚起し、理解を深めるための教材化がなされている。
 ②授業の展開部・終結部においては、教師主導の授業がなされているが、導入部においては、グループ学習を行い、生徒が積極的に学習に参加し、読みを交流することで、興味・関心を高め、内容の理解を深めるなど、学習者への配慮が見られる。
 ③「読解の三段階法」による学習指導については、次のように言える。
 ア・実践に即した工夫がなされている。
 イ・「素材読み」を適用とあるが、実際には、三段階法そのものの適用となり、深い読みがなされたことが、生徒の感想文からも推察される。
 ウ・構造的板書が「読解の三段階法」を支えている。
 ④心情語に着目した指導は、ア・日記の特性と、平安朝の時代特性、イ・清水文雄氏の影響による伊東武雄氏のことば指導観に基づいている。
 ⑤抽象的な『蜻蛉日記』の「序」

の理解と、道綱母の生涯の理解とのために、傍注資料・「かげろふ日記年表」が利用されている。⑥感想文は、理解の浅いものも見られるが、優れた理解を示しているものが見いだされ、生徒の理解の実態を把握する上で有効である。

伊東武雄氏の古典教育は、授業の工夫・準備↓授業の実践と実践の記録↓精細な省察↓原理・方法の把握、という過程をへて、授業の改善がなされている。長年にわたる実践を見る時、この過程が有効に働いていると考えられる。伊東武雄氏の読解の三段階法を軸とした実践としては、他に（ハ）「古典学習指導の反省と課題―伊勢物語23・24段の受容の実態を中心に―」（二九号・一九八五年六月）、（メ）「古典学習指導のとりくみ―伊勢物語 二四段々梓弓々の場合―」（三七号・一九九四年三月）がある。前者は、①読解の三段階法の適用、②二三・二四段の比較読み、③生徒の感想・鑑賞の重視、④表現による思考の深化、⑤ノート指導に留意、という点に配慮し、工夫して授業が行われ、生徒の受容の実態が詳細に考察されている。後者は、①新潮日本古典集成『伊勢物語』（渡辺実校注 一九七六年）を教材とした学習（頭注・傍注を利用した口語訳）、②読解の三段階法に基づく学習プリントによる学習、二三段との比較読み、③池田勉氏『伊勢物語』（成城国文学会文芸読本Ⅱ五、六七・六八頁）を用いての鑑賞の深化、④練習問題、⑤短作文という展開による学習指導の報告である。

下田 忠氏（サ）「課題意識にもとづく学習指導の実際―古典教育の場合―」（二六号・一九六九年四月）は、一九六三年以来六年にわたる課題学習の集大成ともいえる。

課題学習のねらいは、生徒の側と教師の側とから押さえられている。前者は、①学習活動の主体化、②学習の内面的な深化―理解の完全化、③発展的学習の推進と応用力の培い、④集団思考の喜び、⑤復習の便宜、後

| 学期 | 単元 | 教材 | 指導目標 | 指導項目 | | 課題との関連 |
|----|-----------------|------|---|--|---|---|
| | | | | 内容把握・鑑賞関係 | 文語のきまり関係 | |
| 二 | 八 物語 (中世) | 祇園精舎 | (イ)作者の人生観を表現を通して考える。 (ロ)事件の推移を読み取って当時の思想社会の中で武家としての人間像の造形をとらえる。 (ハ)物語の構成の巧みさ、語法、語いの特徴を理解する。 | (1)無常観、思想的基礎(一)(二) (2)章段の論理の展開(四)(五) (3)清盛の系図(八) (4)武家の立場(旧貴族勢力との対比)(四)(二〇) (5)作者の創作上の立場(八)(二〇)(二二) (6)合戦の場面設定順序合戦装束、合戦の前座、真打 | 対句、七五調、比喻 対句形式↓破綻↓論旨 屈折 和漢混淆文 合戦用語 指示語 物語の状態 文脈 擬態、擬音語、音便 中世の語法まとめ | 課題一、五、七 〃四 〃六 〃三、六 〃六、三、 一八 〃七、一六 〃九、一五、 一六、一七 〃一九 〃八、九 |

者は、①学習目標、学習の方法・順序の提示、②教室での学習の有効化、能率化、③指導項目の整理と体系化(三九頁参照)としている。

課題の作成は、一・二年(乙Ⅰ)、三年(乙Ⅱ)の教材を見通して、指導計画の大綱を決めたとし、一年では、読解の基礎になる「文語のきまり」についての知識と理解を与えること、二年では、読解の応用力を養うために、読みの深まりを志すことに重点を置き、三年は、読解力・鑑賞力の完成を目指してなされた。また、指導目標、指導項目との関連、読解上の問題点や鑑賞の醍醐味、教室で意図する能力の段階等にも配慮されている。このようにして、作成された課題は、三年間の指導計画に、次のように、組み込まれ、位置づけられている。

この、「祇園精舎」の課題は、①表現を通した作者の人生観、②作者がその人生観に至った思想的基盤、③「祇園精舎の鐘の音」「沙羅双樹の花の色」から当時の人々に浮かんだ状況、④対句とその破綻に注意することによる章段の論理把握、⑤文章の旋律、七五調の感得、⑥平家物語の文体、⑦比喩の巧みさの指摘、⑧本文からの平家の系図完成を取り上げている。これらの課題は、学習指導の中に、次のように組み入れられている。

〔導入〕 I 教材の出典と教材の背景に対する注意の喚起

II 指導目標の確認

〔展開〕 I 主題の推定

課題①②を念頭において黙読 ③について補足説明

II 前段の論旨の展開（一部グループ学習）

課題④を考えさせ、⑤⑥を発問

III 後段の論旨の展開

課題⑧を考えさせる

IV 主題の確認

課題①②に戻り、考えさせる

〔結び〕 I 時代背景、文体と内容に関する補足説明

II 前段暗唱

（五九―六一頁参照）

展開部の「I 主題の推定」から、「IV 主題の確認」にいたる展開を見れば、課題の解決のみに終わるのではなく、グループによる学習も組み入れ、課題に基づき内容を深く考えとらえさせる展開になっている。

課題学習の反省点として、課題の不備や読解・鑑賞の系統化に問題が残るとし、課題のみやればよいという安易に流れる生徒の指導、主体的学習態度の阻害に陥らぬ配慮などが必要とされている。また、生徒自らが課題を意識の中で作り、解決しつつ読み進めることができるようにすることを、目指すところとして挙げている。

鶴野馨氏（ス）「古文における課題学習の実践から―蜻蛉日記の場合―」（一七号・一九七〇年六月）も、

課題学習を全面的に展開した実践を取り上げ考察している。実践は、三年生六クラス（内二クラスは就職希望）を対象に、二学期の三六時間をかけて行われた。教材は、『蜻蛉日記』（序文・父の旅立ち・町の小路の女・母の死・兼家の病氣・葵のまつり・ゆするつきの水草・初瀬詣で・跋文）で、一部は学習課題のプリントに補説して省略している。授業の展開は明らかではないが、課題に従って展開したと考えられる。課題は詳細を極め、例えば、序文（約二六〇字）に対して二五項目の課題が作成され、文法・語意・口語訳・内容把握に関する課題が混在している。課題には、「7『世にふる』」は、この世に生きている、暮している意であるが、『世』には俗人の世界の意もあることを手がかりにして、作者のいわんとするところを説明せよ。参考『世の中になほあらましかば（出家せずにといたら）今は高き位にもなりなまし（宇津保物語・春日詣）』のように、説明を加えた上でより深い点について尋ねるといふものがいくつも見出される。課題によって、生徒が文章を辿りつつ、文法に照らし、語意を確かめ、口語訳をし、参考・説明を考慮して内容を把握し、理解を深めることが目指されている。この学習のまとめとして、就職クラスには、「兼家、または作者に宛てた手紙」を冬休みの課題とした。鶴野馨氏は、「この手紙によって、課題学習の成果のあらましはとらえられる」（六五頁）とし、「上巻の本の一部を読ませただけですが、読後に書かせた『兼家、または作者に宛てた手紙』は、僕を大いに力づけてくれました。」（六〇頁）と述べている。

阿部真人氏（シ）「古典学習における教材反応と鑑賞の深化・拡充―中学校における万葉集の場合―その一読後の教材反応を中心として」（一六号・一九六九年4月）・同氏（セ）「古典学習における教材反応と鑑賞の深化・拡充―中学校における万葉集の場合―その二 指導の実際」（一九号・一九七二年一二月）は、学習者の教材反応を調査し、それに基づく指導法とその効果を考察した論稿である。まず、『万葉集』から一五

首を教材化し、一読後の教材反応を調査し、積極的姿勢、消極的姿勢をよせる要因を探った。その結果として、前者は、「歌意が平明であり、作者の感動した実感が生徒の生活経験からして理解しやすい」ものであり、後者は、「歌意がつかみにくく、作者の感動の実感が理解しにくいもの」であることを明らかにした。次いで、消極的姿勢を抱く和歌に関しては、A、大意把握のために①漢字、②かなづかい、③語句、④文脈（指導の中心）、B、作者の感動の発見と追体験のために①作者の感動を集約したことばの味わい、②学習者の生活体験の補充、③作者の生きた歴史的背景の理解、④声調の把握、という点から指導を試みた。指導に関しては、生徒の第一印象を大切にし、親しみを感じている点や学習抵抗となっていない点をはっきりと見定めることから出発し、最終的には、和歌の生命である声調を味わわせるために朗読を重視することが述べられている。この試みでは、学習者主体の学びの成立が目指され、そのために「学習者の実態に即し、古典教材の実質を解析しつつ、指導目標の具体化を図り、指導による学習者の古典学習についての質的転換の相を究明していくこと」（注5）が進められているといえる。

下田 忠氏（夕）「説話教材の取り扱い―ひとつの試み―」（二〇号・一九七三年二月）は、「教育のすべてが問いなおそうとされようとしている今日、古典教育はどのような課題をにない、どのような展望のもとに進めていけばよいのか。」「現代高校生の精神的荒廃状態が指摘され、問題追求の姿勢が失われていると言われる中で、われわれ国語教師は古典の教室で、いったいどんな役割が果たせるのであろうか。古典文学の遺産によって学習者の思考力をきたえ、人間的内容をふとらせるために役立つ手だてを何とかして捻出すべく苦悩してみなくてはなるまい。」（二二二頁）という問題意識をもってなされた説話文学実践の考察である。上のような問題意識に立ち、下田 忠氏は、説話教材選択の視点として、「文章表現の展開に示されている作者また

は作家大衆の現実把握の発想の仕方と、学習者個々の現実把握の発想の仕方とを、対決させ、格闘させることにたえうる教材を選びたい。」(一二六頁)とし、「つまり、一つには学習者の問題意識にうったえかけ得る作品、二つにはその時代社会を反映し、民衆の心が読みとれる作品、を選びたい」(一二七頁)とした。この説話文学教材化の背景には、説話が一種の歴史上の記録から「説話文学」としてとらえ直されたこととも関係している。実際に教材化されたのは、「清水観音利益のこと」(『沙石集』)であった。指導目標は、「(1)当時の庶民の願いを読み取る(その歴史的現実生きる民衆の願いは何かを知る)、(2)説話文学の本質をつかむ。」(一二七頁)とされている。授業は、①説話文学史、及び沙石集の文学史的位置と特色の概説、②朗読↓黙読↓あらすじ発表↓教師の通釈、③課題学習(五つの課題に基づきグループ学習)、④全体での話し合い、⑤説話の世界の庶民に対し、現代の一般庶民の願いは何かについて作文(四百字詰め二枚)と展開した。結果については、生徒の説話のとらえ方は、概して観念的なたらえ方になっているが、「説話の内容に触発されて、自分たちの現実を見つめる結果になっている」ということ、これは確かにひとつの事実である。」(一三四・一三五頁)とまとめている。この試みは、生徒の実体に即しながら、新しい古典教育の試みを、文学としてとらえ直された説話文学の教材化に探った実践研究であるといえよう。

(2) 古典教育実践の考察のまとめ

以上、昭和四〇年代の古典教育実践についてに考察した。整理して特色をまとめれば、次のとおりである。

A 古典教育の目標

目標として、①時代に生きる人々のものの見方・感じ方・考え方の理解、作者とその心情理解、②読解力・鑑賞力・応用力、古語・古典文法の理解、などが掲げられている。

B 学習者の位置

①学習者の興味・関心、学習者の問題意識を授業に生かすことが試みられ、学習者の教材に対する反応調査と反応に即した授業も試みられた。②古典教育の問い直しが生徒の実態を背景になされている。

C 古典教育の方法

①指導の系統化が目指された。課題による学習指導、課題を組み入れた学習指導、読解の三段階法などの学習指導過程の系統化が見出された。また、課題学習による三年間の古典教育の系統化も試みられた。②この時期、過去の集積による課題学習の集大成がなされたが、課題は生徒の課題意識を汲み上げたものではなく、授業者の与えたものとなっている。③古典教育の問い直しに関連して、時代社会を反映し、民衆の心が読みとれる教材の開発が試みられた。④三〇年代の感想メモによる授業は見られない。⑤虚構の作文(手紙)を取り入れた実践が見られる。

3 昭和五〇年代(一九七五～一九八四年)の古典教育実践の考察

(1) 古典教育実践の考察

世羅博昭氏(チ)『『平家物語』の学習指導―『一の谷合戦の場』をとりあげて―』(二四号・一九七八年八月)は、全ての生徒に、①学習への興味と関心とを持たせ、それを高めていくこと、②学習の意義を理解させ、課題意識を持って学習に取り組むこと、という二点の可能な教材化と指導方法とを求めて試みた実践を考察したものである。教材化に関しては、「テーマのもとで一貫した学習を組織していくやり方が、生徒の学習意欲を持続しやすいし、学習効果もあげられる」との考えから、「戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の姿をみ

つめよう。」という学習テーマが設定され、それに基づき、「ある特定の中におけるさまざまな人間の生きる姿を取り上げた方が比較しやすい」（以上六二頁）と考えて『平家物語』の「一の谷の合戦の場」を取り上げている。「一の谷の合戦の場」の教材化の理由としては、源氏方、平家方の数多くの武士と数人の女性が登場し、武家的側面、公家的側面に加え仏教的側面からも味わうことができる点が挙げられている。

授業対象は一学年三クラス。時期と時間は、二・三学期に計一七時間。教材として、導入プリント二枚（『平家物語』のあらすじと「一の谷の合戦の場」の位置・学習テーマ・「一の谷の合戦の場」を取り上げた理由と授業計画・「一の谷の合戦」図と両軍紹介）、本文一八枚（大村はま氏に学んだ「傍注資料」一枚・原文に頭注と現代語訳のついた資料七枚）、内容把握とともに学習方法を身に付けるための「学習の手引き」三枚が準備された。授業は、「導入」①導入（一時間）、「展開」②「二度之懸」（四時間）、③「坂落」（二時間）、④「敦盛最期」（三時間、内一時間はグループ学習）、⑤「忠度最期」「重衡生捕」「知章最期」「小宰相身投」から一つを選びグループ研究（二時間）、⑥「忠度最期」（一・五時間）、⑦「重衡生捕」（一時間）、⑧「知章最期」（二時間）、⑨「落足」（二〇分）、⑩「小宰相身投」（四〇分）と展開し、原稿用紙二枚にいくつかの課題の中から一つを選び感想を書かせている。

世羅博昭氏は、二年後に（ツ）「古典Ⅱにおける『源氏物語』の教材化―「明石の上物語」と「浮舟物語」をとりあげて（2）―」（二六号・一九八〇年一〇月）を発表した。ここに報告された『源氏物語』の実践に關しては、以下のように考察したことがある（注7）。

教材化は、①世羅博昭氏自身の「源氏物語」への深い関心と理解、②生徒の実態、生徒の興味・関心、意欲的な読みの可能性、③人物への焦点化、④源氏物語の構成上の重要性、優れた形象性、興味・関心をひく受領

層に属する女性の生き方、作者紫式部の内面追求の可能性という点、⑤「明石の上物語」、「浮舟物語」それぞれの内容把握との関連、という点からなされた。以上をまとめると、①を基盤とし、②を教材化の中核的観点に、③を方法として、④を具体的方針とし、⑤を配慮して教材化がなされている。⑥この教材化の有効性は、ア・場面をとらえ人物像を浮き彫りにする教材化、イ・興味・関心を引く教材化、ウ・人間を考えさせる教材化に求められる。⑦この教材化の方法は、昭和四〇年代の実践から獲得されたものである。

学習指導のねらいは、指導法研究のねらいと指導目標に分けてまとめたい。前者は、古典Ⅱという科目の性格上、大きな課題である、①生徒の学習意欲の持続を中心のねらいとし、そのためには、②古典の世界に読み込み、古典を楽しみながら読むことが必要であり、その方法として③登場人物を鮮明にさせる方法について具体的に検討するというねらいが立てられている。後者は、技能・価値・態度という観点から目標がたてられ、積極的な自力学習、表現・内容の鑑賞、古典に親しませることが目標となっている。

指導方法については、以下のとおりである。指導過程は、①生徒の学習意欲の喚起と持続を図り、②教材の特性を考慮し、③多様な学習形態の下に、④指導目標の達成を目指して、構造的に組まれている。「学習の手引き」は、①授業（一斉学習、グループ学習、個別学習形態）成立の基盤であり、②学習意欲を喚起し、持続させ、③問題意識をもたせながら、教材内容を明らかにし、④学び方を学ばせるという点で大きな役割を果たしている。表現・理解の関連指導においては、①様々な工夫により生徒の問題意識の拡充・深化を図り、②多様な表現形態の下に、③楽しく表現させ、④併せて、教材内容の深い理解にいたらせている。

世羅博昭氏の実践の特徴は、次の点に見出される。①学習者の興味・関心・意欲が重視されている。②学習者のテーマ理解を深めるために古典が読まれ、それが古典理解を深めることにもなっている。③主体的な学習

を成立させるための方法と場が設定されている。④国語学力を育成することが学習の過程でねらわれている。

世羅博昭氏は、「『国語Ⅰ』『国語Ⅱ』における古典指導—生き生きした古典教室の創造をめざして—」（二九号・一九八五年六月）において、実践上の課題として、①技能主義に基づく古典指導の変革を、②指導内容の焦点化と総合化を、③指導過程・指導方法を豊かで変化に富んだものに、という三点を挙げ、それらに 대응する方策として、国語Ⅰ・国語Ⅱの総合的特色を生かした、主題を軸とした古典単元学習の構想を明確にした。ここでは、単元構想について、「学習者が自らの必要感から、自らある目的をもって何かを求めているときに、学習活動は活発となり、主体的となるものである。したがって、単元主題の設定にあたっては、学習者にとつての興味・関心や問題意識を踏まえた主題を設定し、その主題（学習課題）に対する認識の深化・拡充を目指して古典を読むという立場に立って、単元を構想していきたい。」（一七五・一七六頁）と述べている。また、目標の設定に関しては、「学習者を生き生きと学習させるためには、学習者の目標、すなわち学習目標と、指導者の目標、すなわち指導目標とを同じにしないのがよい。主題を軸とした古典の単元学習においては、学習目標は主題（学習課題）に対する認識の深化・拡充であり、指導目標は、学習者の展開する学習活動（＝言語活動）の中で国語学力を習得させることである、というようにするのである。」（一七六頁）と述べている。昭和五三（一九七八）年の学習指導要領の改訂による新科目『国語Ⅰ』『国語Ⅱ』の創設は、現代文と古典を統合した主題単元学習の可能性を広げるものであり、その具体化が広島大学付属高校において数年にわたって展開された。

新治 功氏（テ）「主体的な古文学習」（二六号・一九八〇年一〇月）は、主体的な学習の成立を次のようにとらえている。

| | |
|---|------------------------------|
| 主体的な読み | |
| 〈 読みの過程 〉 | |
| (活動の場) 1 基礎的な作業—読みのかまえ 2 個人の読み—読みの始まり 3 集団の読み—読みの深まり (価値の発見) 4 個性的な読み—読みの完成 (価値の獲得) | (活動) 読む 書く 話す 聞く |

(一七六頁)

主体的な学習のためには、教材は「その文章が価値を持つとともに、学習者が興味を持つ文章でなければならぬ」、「あるいは、学習者が興味を持つように教材を構成する必要がある」(一七五頁)とし、「読みの過程」の四段階については、「四段階の様々な場面に、読む・書く・話す・聞く、という四つの言語生活が行われる。そして、それらが互いにかみあった、生徒自身の活動の場が設けられていなければならない。主体的な読みを行わせるためには、生徒自身の活動の場を設けることが必要である」(一七六頁)と説いている。報告された『伊勢物語』六段の授業は、この考えに立ってなされた。「1基礎的な読み」では、「音読する。語句の意味・用法を理解する。第四段との関連を考える。」となっている。「2個人の読み」では、「気に入った箇所を独白文または描写文にする。」「3集団の読み」では、各自の文章を持ちより修正、補充を加えて物語文をつくる。」こと、「4個性的な読み」では、朗読を聞くことによって文体を味わい、個性的な表現世界を自分の中につくる」(一七九頁)ことが試みられている。

大崎康子氏(ナ)『『古典』を読む—『枕草子』の場合—』(二六号・一九八〇年一〇月)は、読解的方法に

よる古典教育のすぐれた達成を思わせる。授業については、「講義にしたり、演習にしたりしながら基礎読みをし、読み深めの過程で、表現の内実に迫ろうと試みた。作品への教師の評価は、そのまま生徒にはねかえる。教師にとって真に「古典」たり得る時、作品は教室で光りだす。」(二二六頁)と述べられている。教材には『枕草子』の内、「古典Ⅱの教材となっているもの、入試問題として頻度の高いものの中から」(二二五頁)一二の段が選ばれた。授業では、例えば、中村真一郎の言葉を媒介として読み取った、二七七段の清少納言の「転成の契機」は、誰も生きることにほらまれているものとして普遍化される。清少納言の「紙の白さ」に魅せられるところには、「書く楽しみ」が潜んでいることが見出され、それは、人間にとっての表現の意味をとらえることにつながられている。併せて、室生犀星の「日本美論」の「紙」を紹介し、文学研究の誘い水ともしたことが述べられている。生徒の反応も鋭い。

(前略―渡辺) 私達のまわりに紙はあふれ、毎日大量の紙に追いまくられて生きている。私達は、「紙の白さのつ美」を見出す余裕など、とっくに失ってしまった。千年前、清少納言を生へと引き戻した「白い紙」は、今や私達を焦燥感へと追い込む。物のあふれる中で、物そのものの価値を見失ってしまった私達の状況は、例えば、安部公房の「自分の名刺」にとってかわられる主人公にそっくりなのではないか。「物」を見失ってしまった私達は、自分も含めて「人間」そのものを見失っている。(中略―渡辺) けれど、例えばこういう現代の状況を「壁」として認識し、その中にある人間の虚しさを、ユーモアさへ伴って虚構化し、表現する力が人間にある限り、「この世はまだ生きているに値する」のではないかと思うのである。(T・N女子) (二二二頁)

古典の教室が、授業者の深い読みと、それを受けとめ考えることのできる力ある学習者によって、理解と認識を深める学びの場へと高まっている。

藤原敏夫氏(三)「『狂言』学習についての一つの試み―舞台『瓜盗人』の録画を使って―」(二六号・一九

八〇年一〇月)は、「狂言」の舞台をビデオテープに収めたものを「中心にすえた学習を考え、舞台(録画)が、生徒の心にどのようなようにひびき、台本をよむこととはちがつてどのようなにとらえられるだろうかということ」(二三五頁)を明らかにするために、語釈つき台本を与えた後録画を見せたAクラス、語釈なしの台本を与えた後に録画を見せたBクラス、録画を見せた後語釈付き台本を与えたCクラスで、実験授業を行い考察したものである。舞台芸能の指導の方法を学習者の反応の中に探った論稿といえよう。

竹盛浩二氏(又)「工業高校における古典教育の実際」(二六号・一九八〇年一〇月)は、「底辺の内実は実に深刻な」(二四二頁)工業高校における、三年生を対象とした古典教育の実際を報告したものである。ぎりぎりの状態の中で成立した実践のいくつか、生き生きと語られている。「限定読み」の有効性、学習者にとって身近な授業者の恋のエピソード(虚構を含む)によって興味づけ、プリント学習によってなされた『伊勢物語』の授業、そこからは『かきつばた』の五文字を折り込みながら、澄みきった詩情を展開」(二四九頁)した生徒の短歌(ノートの落書き)が引き出されている。入社試験にからめ、話すことを取り入れた「故事成語」の授業、『枕草子』(教科書 二九九段)、『徒然草』(一一、五二段)を教材に、プリント学習として展開した「一時間読み切り」の授業もなされ、「やつと」のことで、生徒たちは古典に対して興味と親しみを少しは持てるようになった」(二五四頁)ていった。これは、昭和四〇年代から五〇年代にかけて現れた深刻な状況下における一つの実践であり、授業者の姿勢、学習者の興味・関心の喚起、教材化(本文・学習プリント)、展開法などに示唆を得ることができるといえる。

片桐啓恵氏(ト)「五里霧中の舳先―一年の終わりの古典人形劇―」(二六号・一九八〇年一〇月)は、「薄気味悪いほど消極的な生徒」に対し、「自分で考え、工夫し、研究し、創造する力をつけること」(以上二〇二

頁)を願って試みられた、一年生四クラスを対象とした実践の一つの報告である。一年間に試みられた単元学習のうち、グループ学習によるものは、百人一首―グループ研究・発表(単元 古典入門)、徒然草―絵本制作(人間探究)、古今和歌集―歌物語(自然と人間)、伊勢物語・古事記―古典人形劇(愛の世界・神話の世界)であった。古典人形劇にいたる経緯は、「初めは、自主性・積極性をつけるため。(ママ)その前に積極的になれるよう発言の材料を持たせる。材料を持つための、調べ方を身につける―それがグループ研究・発表の目的だった。やがて、何かを々つくる々作業を通して古典の楽しさを知るといふ方向に変わってきた。それは、自身の古典を楽しむ方法のさまざまな模索でもあった。」(二〇二頁)と述べられている。教材は、一組 伊勢物語「筒井筒」、二組 伊勢物語「筒井筒」、三組 伊勢物語「都鳥」、四組 古事記「八俣の大蛇」、展開は、本文通読・役割決定(一時間)、脚本・人形・背景づくり(二時間)、上演・反省・まとめ(一時間)と計画されている。グループノートには、授業後の感想が「(前略―渡辺) こういう違った表現で古典に接してみて、あらためて古典の味わい方、おもしろさがわかり、とてもためになったし、なにより僕の古典に対する見方及び価値観がさうとう変わった。今まで古典といえば文法事項を覚えて、ただ読んで訳すだけ、それで終わりとというような感じだったけれど、作者の意図にしても、登場人物の言葉一つにしても、その中にさまざまな想(ママ)がこめられ、感情が入り、まじっているということがわかった。(後略―渡辺)」(二〇九・二一〇頁)と述べられている。片桐啓恵氏の実践の基底に、状況の中で主体を喪失した生徒に働きかけ、主体的、創造的に生きる力をつけたいとする思いが見出される。古典教育もそのために位置づけられていると見える。

五年後に発表された、片桐啓恵氏(ノ)「教室に声をとりのもどすために―群読『平家物語』の群像」を中心―」(一九九・一九八五年六月)も、古典教育をとおして生徒の変容を目指すものとなっている。実践は、

大村はま氏や世羅博昭氏の理論と実践に学び、行われた。生徒の実態は、「人間としての基本的なコミュニケーションの姿勢ができていない」「声を出せない、話を聞けない生徒たち」(一五六頁)として把握されている。それは、学校教育によって産み出され、「身体そのものが人の話に対して拒絶反応を起こしてしまう」「身体性の問題」(一五六頁)とされ、ことばの学習の成立に関わる問題としてとらえられている。そのような実態に対し、①身を乗り出して話を聞く経験を積み重ねさせ、②言語活動を中心に展開する単元構成を試み、③再表現(絵画化・文章化・音声化・劇化)させ、④一人一人を学習の主役にする授業が求められている。『平家物語』の群読は、このような求めの中から産み出されたといえる。動機は、「一つの文章と出会い、その作品が持つことばのエネルギーとまともに格闘していく学習課程の中で、自分の力によって学び、つかんだものを再表現する感動経験をつくってやりたい。そのためには、全員が力を出しきらねばやりとおせぬような困難な、しかし手応えのある仕事を用意する必要がある。平家物語の群読は、まさに格好の学習であった。」(一五九・一六〇頁)と述べられている。

対象生徒は、二年家政科一組、二年商業科二・三・五組となっている。目標は、①〈諸行無常〉、〈盛者必衰〉の思想を単に嘆きの思想としてではなく、滅びの運命と背中合わせに生を生き抜いた一人ひとりの生きざまによって考える、②々語り物々としての『平家物語』が持つ文体のエネルギーを群読することによって再表現し、体感する、③グループ学習(研究・発表)を通して、図書室での文献利用の方法、発表資料のつくり方、発表のし方を学び、全員が学習の主役になる、が掲げられている。授業の展開は、①声で表現するということ(一時間)、②『平家物語』概略の理解(一時間)、③グループによる内容研究・ナレーションづくり(三時間)、④グループ研究の発表(一時間)、⑤群読研究・群読練習(三時間)、⑥群読発表(一時間)と計画されている。

授業の実際では、基礎理解、学習活動の基礎訓練、自発性・創造性の各面について細やかな配慮と指導の工夫が見出される。この実践をとおして、片桐啓恵氏は、「へしなやかな身体」をつくることが、国語教育の基本に考えられていい。」と提言し、「国語の学習で得た力が、生活の中のどのような場で活かされる可能性があるかという点を、授業構想の視野におさめておきたい。」(以上一六九・一七〇頁)としている。

後に、発表された、片桐啓恵氏「ファンタジーとしての『竹取物語』をまるごと読む―定時制一年生の教室で―」(二八号・一九九五年三月)は、生徒に、①古典を通して、ことばの世界をより豊かに広げることができる、②人間の想像力・表現力の可能性を、時間・空間のつながりの中で味わうことができる、③人間の生き方の不易流行を考えることができる、ということを感じてもらいたい、読む楽しさを分かち合いたい、として行われた授業の報告である。まるごと読むことの意味は、物語全体を読み味わうことと、読んだ物語を自分の中に取り込んで消化することとされている。後者には、再表現が課され、登場人物の視点で独白体で物語全体を書くという方法が用いられている。対象は、定時制普通科一年生二クラス、二学期、三学期の計四〇時間をかけて行われた。生徒の学力実態を踏まえて、「この学習で育てることばの力」が明確な目標とされている点にも注目される。

吉本浩士氏(ネ)「『国語Ⅰ』古文入門期の指導について」(二八号・一九八四年六月)は、「総合的な科目の性格を生かした『国語Ⅰ』の効果的な指導」という研究主題について、「古文指導の立場から、／・小・中・高校の一貫性を図る。／・現代文との総合化をめざす。／言語の教育を重視する。／という視点でとらえ、入門期における古文指導のあり方について、実践したものをまとめ」(六二頁)たとされる。指導にあたっては、次の項目を重視した。①朗読で読みを深め、古文になれる。十分読めないものは十回以上視写させ古文に慣れ

させる。②ノートの取り方を工夫する。原文を視写させ口語訳をして授業を受けさせる。③言語事項は精選して指導。動詞と主な助動詞の指導。④辞典・参考書を利用させる。⑤文章の大体の意味をつかませる。理解と表現の関連指導、要約、感想などを書かせる。「古文入門」では、古典を学ぶ意義の解説、古典についての話し合い（一時間）、中学校作品で文学史的位置付けや古典の範囲の再確認（中三教科書掲載「古典の世界」のプリント利用）、高校での学習方法（一時間）と展開している。

（2）古典教育実践の考察のまとめ

以上に見てきたことを整理してまとめれば、次のようになる。

A 古典教育の目標

技能・価値・態度という観点から目標が立てられた。主題単元学習の目標設定は、古典に内在する価値目標の設定から生徒の変容を求める外在的価値目標の設定を含むものへと広がりを持つに至った。次のような目標が見られた。①人間の姿・生き方、主題把握、鑑賞。②読解力。③古典への関心、古典への親しみ。

B 学習者の位置

①学習者の興味・関心を尊重し、学習者の実態に即した学習指導が行われた。②学習者の主体的な学習が求められ、そのために以下に掲げた方法が試みられている。

C 古典教育の方法

①学習者の主体的な学習のために、教材の開発・編成、学習テーマの設定、主体的活動の場・方法の設定がなされた。②教材は、内容的価値と学習テーマ、学習者の実態への配慮から開発、編成された。また、口語訳、傍注をつけた教材も用いられた。③主体的活動の場として、個別学習、選択学習・グループ学習・発表による

学習などが試みられ、主体的活動を支える方法として、学習テーマが設定されたり、学習課題、学習の手引きが作成されたりしたほか、創造的表現（手紙・再表現・物語化）なども用いられた。④①③を生かした単元学習、主題単元学習が試みられた。

三 戦後古典教育実践考察のまとめ

以上、『国語教育研究』誌掲載の古典教育実践論稿を、昭和三〇・四〇・五〇年代ごとに紹介、考察してきた。その全体を、古典教育の目標、学習者の位置、古典教育の方法の三点から整理して掲げれば、次のようになる。

A 古典教育の目標

①昭和三〇年代の、日本文化の理解、文章の特色理解、古文の実感的理解、鑑賞、人々の心と文学の関係理解などの古典の内在的価値の理解・感得に関わる目標から、四〇・五〇年代を経て古典に内在する価値の理解・感得と、それによる学習者の変容へと目標が変化していった。

②五〇年代の主題単元学習の目標設定は、古典に内在する価値目標の設定から外在する価値目標の設定を含むものへと広がりを持つに至った。

③五〇年代に、主題単元学習の構想とかわかって、学習者が学習のゴールを目指して行う学習活動をとおし、言語能力を育成しようとするものが求められ、学習者の目標と指導者の目標を分けて考えようとする論が現れた。

④目標が価値・技能・態度という観点から設定されるにいたった。

B 学習者の位置

①三〇年代には、学習者の主体的参加とともに学習者の感想を生かす授業が求められ、四〇年代から五〇年代には、学習者の興味・関心を生かす授業、学習者の興味・関心を軸にした授業へという変化が見られる。

②四〇年代には、学習者の教材に対する反応調査と反応に即した授業も試みられた。

③古典教育の問い直しが生徒の実態を背景になされている。

C 古典教育の方法

①三〇年代から四〇年代前半は課題学習の時代、四〇年代後半から五〇年代は主題単元学習の時代ととらえることができる。

②三〇年代から四〇年代にかけて課題学習が展開し、四〇年代には、高等学校の三年間を見通した課題学習計画が現れるなど、過去の集積による課題学習の集大成がなされたが、課題は生徒の課題意識を汲み上げたものではなく、授業者の与えたものとなっていた。ここに課題学習がその後発展しなかった理由があるとも考えられる。

③四〇年代には、指導の系統化が目指された。課題による学習指導、課題を組み入れた学習指導、読解の三段階法などの学習指導過程の系統化が見出された。

④「感想メモ」に基づく授業は、四〇年代には、見られなくなった。

⑤五〇年代には、主題単元学習が行われた。四〇年代に生じた高校生の実態の変化が生徒の興味・関心に応じた授業を展開することにつながった。これが主題単元学習の背景となっている。また、学習指導要領の改訂による国語Ⅰ・国語Ⅱの新設もその背景となっている。現代文、古典を主題によって統合し、主題の深化、拡充を図る主題単元学習は広がらなかった。

⑥三〇年代の授業の方法として、課題学習、感想文・感想メモを用いた授業が試みられた。また、話し合い・討議・感想メモの利用をとおして、学習者の交流による学習の深化が求められている。作文・感想の教材化、課題プリントの作成、話し合い・討議、教材の比較、朗読記録表などによる学習指導も試みられた。

⑦四〇年代には、古典教育の問い直しに関連して、時代社会を反映し、民衆の心が読みとれる教材の開発が試みられた。虚構の作文（手紙）を取り入れた実践が見られた。

⑧学習者の主体的な学習のために、教材の開発・編成、学習テーマの設定、主体的活動の場・方法の設定がなされた。教材は、内容的価値と学習テーマ、学習者の実態への配慮から開発、編成された。口語訳、傍注をつけた教材も用いられた。また、主体的活動の場として、個別学習、選択学習・グループ学習・発表による学習などが試みられ、主体的活動を支える方法として、学習テーマが設定されたり、学習課題、学習の手引きが作成されたりしたほか、創造的表現（手紙・再表現・物語化）なども用いられた。

おわりに

戦後の古典教育実践の歴史を『国語教育研究』誌の掲載論稿に探ろうとした。いま、課題を掲げれば、次のようになる。

①六〇年代・平成年代における古典教育実践について考察すること。

②戦後古典教育実践の変遷と学習指導要領との関係、古典文学研究（理論・成果）との関係、教育状況との関わりなどについても丁寧な考察すること。

③今回果たせなかった、『国語教育研究』誌掲載の古典教育論、古典の受容に関する実態調査に関して考察

すること。

注1 増淵恒吉氏「国語科における課題の与え方」(『国語科学習指導の方法』一九五三年五月 教育書林刊)

注2 例えば、西尾実氏「八 文学活動としての鑑賞学習」(西尾実氏『国語教育学序説』一九五七年四月 筑摩書房刊) 参照。

注3 藤原与一氏の提唱による「素材読み」・「文法読み」・「表現読み」の三段階からなる読みの方法。「素材読み」は、表現内容の素材をとらえる読み、「文法読み」は、素材の関係、ことばの比較、部分と全体との関連など、いっさいの関係把握や要素比較による読み。「表現読み」は、比較、分析を統合した全体的理解、大局的読み。『毎日の国語教育』(一九五八年五月 福村書店刊)、『国語教育の技術と精神』(一九六五年七月 新光閣書店刊)、『理の国語教育と情の国語教育』(一九七〇年十一月 新光閣書店刊) 参照。

注4 戦後古典教育実践史の研究(六)―昭和四〇年代の伊東武雄氏の場合―(中国四国教育学会誌『教育学研究紀要』第四四卷第二部平成一一年三月二五日)

注5 野地潤家氏「まえがき」(阿部真人氏『古典教材の学習指導』一九七六年四月 文化評論出版刊)

注6 戦後古典教育実践史の研究(一一)―昭和五〇年代の世羅博昭氏の場合―(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第四卷一号 通巻第六号 二〇〇〇年一月)

付記1 資料の収集に関しては、広島大学教育学部国語教育研究室の奈良田明美さんのお世話になった。記して感謝申し上げます。